

旅 と 滞 在

尾崎喜八詩文集 2

創 文 社 版

尾崎喜八（おさき・きはち）

1892—1974.

創文社刊行書：「尾崎喜八詩文集全十巻」，「私の衆讃歌」
「夕べの旋律」「その空の下で」「田舎のモーツァルト」訳
書：デュアメル「わが庭の寓話・動物譚と植物誌」，ヘッ
セ「画と随想の本」，バグダール「牧草の本」

尾崎喜八詩文集 2

0392-992020-4226

昭和 34 年 5 月 30 日 第 1 刷発行

昭和 47 年 5 月 25 日 第 3 刷発行

定価 1500円

著作権者 尾 崎 実 子

発 行 者 久 保 井 理 津 男

電話 (263) 7101(代) 振替 東京 92472

発行所 創 文 社

株式会社

〒102 東京都千代田区一番町17-3

落丁・乱丁本は取替えます

堀内印刷・橋本製本

目

次

行人の歌

(大正十四年—昭和十五年)

五九篇

曇り日の村

朝寒

夜をこめて

早春

バツハの夕空

十一月

希望

エネルギー

靈感

挽歌

或る朝のおもい

慰め

熱狂

草に

三

四

六

八

一〇

一二

一四

一六

一七

一八

二〇

二三

二四

二七

夜の道

東京の秋

追憶

私の詩

夜

エレオノール

母性

日本の眼

暗い源泉から生れて

朝の書齋へ

私は愛する

今日という日は

今朝もまた

寄託

銃獵家に与う

中野秀人の首

二九

三三

三五

三八

四〇

四三

四五

四七

五〇

五二

五三

五四

五六

五七

五九

六二

霜どけ道

精神

この眼は何を

喪の春

夕陽哀歌

朽ちる我が家

郷愁

昔と今

旅のめざめ

道づれ

都会にて

秋

限界

思い出の歌

旅

シュナイダー

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

シュプール

六

新年言志

六

早春の歌

七

縦の樹の歌

七

言葉

九

女の小夜楽

一〇

日の哀歌

一一

野良の初冬

一二

清福

一五

訪問

一七

五歳の言葉

一八

カマラード

二〇

新戦場

二三

旅と滞在 (昭和八年―十三年) 三八篇

友

二七

友

三国峠

一年後

神津牧場

前橋市遠望

猪 茸

夕べの泉

若い白樺

アルペンフロラ

西北風

積雲の歌

夏 野

秋

初冬に

覚めている貧

セガンティーニ

一九

二一

二三

二四

二六

二七

二七

一九

二〇

二二

二三

二四

二五

二六

二六

一九

雲	一四〇
下山	一四一
大いなる夏	一四三
八ヶ岳横岳	一四四
輪鋒菊	一四五
星空の下を	一四六
朝の速記	一四七
山村にて	一四九
山麓の町	一五一
日川	一五三
甲斐の秋の夜	一五四
山中部溝帯で	一五五
金峯山の思い出	一五六
志賀高原	一五九
秩父の早春	一六〇
飯綱高原	一六一

和田峠東餅屋風景

一六三

天上沢

一六四

信州追分

一六五

雪消の頃

一六六

高原の晩夏に寄せる歌

一六七

高原詩抄（昭和十七年）

二三篇

早春の山にて

一七三

春浅き

一七四

かたくりの花

一七五

軍道

一七六

松本の春の朝

一七九

山小屋の朝

一八〇

高原

一八一

その一

一八二

その二

一八三

その三	一八三
その四	一八四
その五	一八四
お花島	一八五
檜沢の朝	一八六
帰来	一八八
牧場	一八九
野辺山ノ原	一九〇
美ガ原熔岩台地	一九三
秋の流域	一九四
御所平 ごしよだいち	一九五
凍死	一九七
夏山思慕	一九八
山を描く木暮先生	一九九
噴水	二〇三

此の糧（抄）（昭和十七年） 二〇篇

此の糧

二〇九

若い下婢

二二

連峯雲

二四

大詔奉戴

二六

少年航空兵

二九

庭訓

三〇

峠路

三三

登山服

三五

特別攻撃隊

三七

三粒の卵

三〇

窓前臨書

三三

新緑の表参道

三三

工場の娘等

三五

父の名

三七

若き応召者に

三九

つわものの母の夢の歌

二四〇

つわものの父の歌

二四二

その手

二四四

歌わぬビッケル

二四五

少国民の秋

二四七

同胞と共にあり（抄）

（昭和十八年）

二〇篇

同胞と共にあり

二五一

石見の国の日本の母

二五三

大阪

二五五

忙中閑

二五六

志を言う

二五八

隣組菜園

二六〇

雪の峠路

二六〇

アリューシャン

二六二

明星と花

二六四

軍艦那智

二六五

春の谷間

二六七

第二次特別攻撃隊

二六八

静かなる朝の歌

二七〇

北門の春

二七一

勤勞作業にて

二七三

消 息

二七四

学徒出陣

二七九

工場の山男

二八〇

弟橘媛

二八一

白鳥の陵にて

二八三

後 記

二八六

行人の歌

生活の野を離れる時
白い大鳥は地面の上で曳きずった、
片方の腐った翼を。

そして彼は朝の空間で高く張った、
美しい運命に満されたもう一方の
純白無垢の新しい翼を。

シャルル・ヴィルドラック